



KOSHIMIZU RED CROSS HOSPITAL NEWS + 小清水赤十字病院だより vol.79

Contents ◆小清水赤十字病院介護医療院開設のお知らせ ◆小児科だより Vol.3 ~「遊び」の重要性~

小清水赤十字病院介護医療院 開設のお知らせ

2021年4月1日より、当院3階病棟の一部を改装し、小清水赤十字病院介護医療院（12床）を開設いたします。

介護医療院とは・・・

介護医療院は「医療の必要な要介護者の方々の長期療養・生活施設」として、2018年4月より創設された新しい介護保険施設です。

今後急速に増えていくことが予想される医療の必要な要介護高齢者の方々の生活を医療と介護の両方で支える施設として、地域に貢献できるように努めてまいります。

小清水赤十字病院介護医療院では、利用者の方々の生活スタイルに配慮し、長期に療養生活を送るのにふさわしいプライバシーの尊重やご家族・地域住民の方々の交流が可能になる環境を整えるとともに、日常的・継続的な医療を提供し、看取りやターミナルも支えます。

介護医療院は、家庭に近い生活環境で長期療養できる施設ですが、必要に応じて医療やリハビリが受けられます。医師・看護師・介護職員だけでなく、薬剤師・リハビリ職員・管理栄養士なども連携し、利用者の皆様が安心して療養生活を過ごすことができるようサービスを提供致します。

当院介護医療院が地域の皆様のご期待に応えられるよう、サービスの質の向上にさらなる努力を続けてまいりますので、今後ともご理解、ご高配賜りますようお願い申し上げます。



お部屋はしっかりとした仕切りにより、プライバシーが守られています。



広い休憩室には明るい日差しが入り、のんびりとした時間を過ごすことができます。



食堂は感染症対策がされており、安心してお食事ができます。

ご利用いただける方

要介護1～5の方であって、病院に入院するほどではないものの、例えば、たんの吸引や経管栄養などの日常的・継続的な医学管理等の理由により、在宅や他の介護保険施設等で支えることが難しい方などがご利用になれます。

利用者負担について

介護医療院での利用者負担は、要介護度と施設サービス内容により介護報酬上の単位が定められています。
介護サービスにかかった費用の1割（一定以上所得者の場合は2割または3割）に加え、食費、居住費、日常生活に必要な費用になります。



介護医療院は「住まいと生活を医療が支える新たなモデル」として創設された施設です。「利用者の尊厳の保持」と「自立支援」を理念に掲げ、「地域に貢献し地域に開かれた交流施設」として役割を担うことが期待されています。
また、「看取り・ターミナル」を支えることも重要な役割となっています。

お問い合わせ

小清水町南町2丁目3番3号
小清水赤十字病院 地域医療連携室
0152(62)2121



小児科だより vol.3

～「遊び」の重要性～



小児科部長
加古 真紀 医師

子どもたちの発達は、「遊び」と共にあり、いつも思っています。

赤ちゃんはまず、「不快」「不快」の感覚を覚え、それを表出し、大人がそれに対して適切なフィードバックをする、この繰り返しから親子に愛着関係が生まれまします。そこから赤ちゃんの世界は広がります。好奇心が芽生え、探索行動が始まります。

大人によって安全に守られている安心感の中で、好奇心は満たされ、さらに探索は活発になります。

こつこつと情緒や知能が育まれていくのです。子どもたちの成長のエネルギーは、とても素晴らしいです。

昨日より今日、今日より明日と、成長し変化し続けるその様子は、花が開いていくのを、つぼみに戻すことはできないのと同じく、



探索行動は生後10か月ごろから盛んになり、なんでも口に入れたり、思わぬところへ移動したりするようになるので、転落や溺水、異物誤嚥などの事故もこのころから目立つようになります。言って聞かせてわかる時期ではありませんし、親は後ろに目がついているのではと思うほどの注意が必要になります。

一人でも大変なのに、乳幼児を二人以上育てる親はもっと大変です。それでも無心に遊ぶ子どもは喜ぶ姿、笑顔を見ると、もつと面白いくらい、もつと楽しいことをと、与えたいのが親心といえます。『遊び』を通して子どもたちは好奇心を満たし、体の動かし方を学び、ルールを学びます。つまり知的能力、運動能力、そして社会性が発達していくこととなります。



子どもの行動範囲が拡大していくことは、危険と隣り合わせという側面があります。これは乳幼児期に限ったことではありません。学童期、思春期になれば、ネット社会ならではの危険にも対処しなくてはなりません。安全に配慮して好奇心を満たしつつ、可能な限り楽しめる環境を作っていくのは、年齢を問わず「親」に求められるミッションだと思っています。

子どもが「危険」を意識するのはとても大切なことで、親たちによって守られているという安心感のもと、学習して自ら危険を回避する行動をとれるようになりまします。

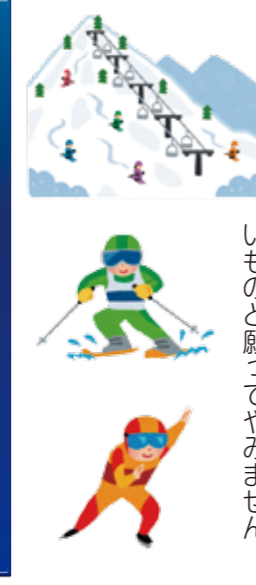
「コロナ禍の今、そして今後、まず人と人の接触ができなくなることで、『経験不足』になる傾向は否めないと思います。従来のやり方が通用しなくなっている今こそ、人間の創意工夫が求められています。『遊び心』の旺盛な脳ほど、その力を発揮するものです。

ソーシャル ディスタンス



この冷たい氷の上を滑ることを遊びにしようなんて、誰が考えたのでしょうか？ 足に板をつけて雪の上を滑るなんて…最初に考えた人は本当にすごいと思います。もともと生活の利便性から生まれたのですが、そこから遊びへ、さらに国境を越えて世界の人々と競い合うスポーツへと発展したわけです。

新型コロナウィルスをいつか克服できるのか？ それとも共存を強いられるのか？ 今後の行方は不透明ですが、1日、1日と子どもたちは絶え間なく成長し続けます。このような環境下でも、可能な限り豊かな経験をさせてあげたいものと願ってやみません。



長戸医師 診療終了のお知らせ

令和3年2月末をもちまして、内科 長戸孝道医師の診療を終了させていただきますのでお知らせいたします。新しい診療担当につきましては、病院ホームページ、または病院受付にてご確認ください。